

『青森県史 文化財編 建築』

大野 敏

はじめに

『青森県史 文化財編 建築』が、平成27年9月に刊行された。評者

は、史跡堀越城整備活用委員会に建造物担当として参画している関係で、知り合いの県史執筆者の方々から、書評執筆をお勧めいただいた。評者は自身は、青森県県下の歴史的建造物に関して、過去に円覚寺厨子（深浦町）や旧百沢寺本堂内宮殿・蘭庭院栄螺堂（弘前市）、旧笠石家住宅（十和田市）、見町観音堂・青岩寺山門（七戸町）などの調査、弘前偕行社の保存管理計画策定監修などの経験を持ち、現在堀越城史跡整備に関わっているものの、青森県の建築史全体を包括した本書の書評はいさか荷が重い。しかし、県史の刊行目的に立ち返ると、本書は「県下の建築文化の実態を広く一般の方々に知つてもらうための啓蒙書」としての役割と、「県下の建築文化の実態や特徴を明らかにしていくための学術的基礎資料」としての役割を担つていているはずである。そのため、「青森県下の建築文化の実態がわかりやすく伝えられているか」という視点と、「学術的基礎資料として有効か」という視点で通読した印象を記してみたい。

本書の成立事情と構成

まず、本書の構成について述べる前に、成立事情の特殊性に触れておくべきであろう。このことは「はじめに」において青森県史文化財部会長・須藤弘敏氏が記されており、およそ以下の3点に要約できる。

- 1・本書は、青森県全体の建築史について包括的に論じ、かつ具体的な情報を整えることを目標に掲げた。そのため過去にない規模と内容となるため、徹底的な学術調査と粘り強い取り組みが必須と認識された。
- 2・そして上記目標を実現するため、建築編主導者としての高島成侑氏（元八戸工業大学教授、平成23年死去）の実績・存在が大きく、個別調査や市町村単位で断片的だった従来調査成果を再構築して、後世の資料足りうる「青森県建築史」実現をめざして企画が準備中であった。
- 3・しかし高島氏を平成23年に失つて、道半ばであつた編纂事業は大きな転換を迫られる。そのため県史特別専門委員・玉井哲雄氏の尽力により項目の精選が行われ、本書の骨格が再構築され、青森県の建築物に関する最も信頼するに足る資料が生まれた。しかしながら青森県の建築史総論を設けるには至らなかつたし、高島氏の遺稿や当初構想の一部を活かすことにも配慮したため、全体のバランスと情報の一部を欠く結果をもたらした。

要するに、本来の責任編集者を途中で失つた状態の中で、専門委員・調査研究員の方々と事務局の総力を結集して本書は上梓された。その状況は、以下に示す本書の構成と執筆担当によつても容易に理解できる。
(執筆者は敬称略。執筆者名の後ろの数字は執筆した項目数を記した。)

I 章 寺院と神社 182頁 76項目

岡田俊治12、齊藤政人4、白川直人1、高橋和雄1、中村隼人50、

蒔苗俊規7、事務局1

II 章 城郭と武家住宅 43頁 18項目

岡田俊治1、齊藤政人6、中村隼人4、蒔苗俊規5、事務局2

III 章 農家と町家 51頁 31項目

岡田俊治4、齊藤政人9、白川直人4、高橋和雄3、蒔苗俊規11

III 章末の「ふるさとの民家」項目 解説7頁 転載35頁

齊藤政人

IV 章 都市・集落と町並 43頁 5項目

齊藤政人1、事務局4

V 章 近代建築 93頁 66項目

岡田俊治16、齊藤政人20、白川直人9、高橋和雄4、中村隼人2、
蒔苗俊規15

付章 発掘成果と文献史料からみる青森県の建築文化 33頁

中村隼人

「絵葉書にみえる県内の建築・町並」7頁、「空からみた県内の建築」4頁、「県内の主な棟札などの銘文」11頁、「県内のおもな建築」69頁、「用語解説」10頁、「掲載図版一覧」17頁

以上の各項目は事務局

つまり、本書の項目編成は玉井哲雄氏の指導を仰ぎ、全体的な指導を玉井氏に加えて須藤弘敏氏と専門委員の澤口正光氏が行い、具体的な執筆は岡田俊治氏、齊藤政人氏、白川直人氏、高橋和雄氏、中村隼人氏、

蒔苗俊規氏の6名の調査研究員の方々が分担され、事務局が執筆の応援と関連諸資料の整理・編集に尽力された。具体的にみると、I章は中村氏を中心に執筆者6名全員と事務局の分担執筆、II章は齊藤氏・中村氏・蒔苗氏を中心に執筆者4名と事務局、III章は齊藤氏・蒔苗氏を中心に執筆者5名、IV章は事務局と齊藤氏、V章は岡田氏、齊藤氏、蒔苗氏を中心には執筆者6名全員、付章は中村氏、卷末の諸資料は事務局、である。なお、巻頭に口絵として23点のカラー写真を掲載する。

本書の特色

前項で紹介したとおり、本書は責任編集者を途中で失ったため総説部を欠く。しかしI章～V章の個別解説において、寺社建築、城郭・武家住宅、民家、都市・集落・町並、近代建築と基本的な建築ジャンルはカバーし、各章で取り上げた項目も、指定文化財に限らず各地域から幅広く抽出されている。したがって読者は、各章の各項目を通覧するだけで、県下の建築文化の様相を把握することができる。

たとえば、I章は寺社の中核建築だけでなく付属建築も取り上げているので宗教空間総体としての重要性も実感できるし、文化財未指定物件も積極的に取り上げてるので地域の建築文化を知る上で参考になる。特に未指定物件の本堂建築の場合、北国の気候風土に合わせて外観の改裝が大きい場合があるが、歴史的建造物の本質をとどめていることを周知する意味で、県史で取り上げたことは重要である。

II章は弘前城とその城下町が中心であるが、三戸・五戸・七戸・八戸

の城郭・代官所・武家住宅の関連遺構を取り上げているため、青森県の風土的特徴を知ることができる。

Ⅲ章の農家・町家は、近代遺構まで含めて取り上げた点と、県下の古民家再発見の契機となつたコラム「ふるさとの民家」を紹介している点が注目される。前者は、従来あまり注目されていなかつた木造旅館建築に力点を置くことが印象深く、こうした建築の価値と魅力が広く周知されることを期待したい。後者は、地方紙「デーリー東北」に昭和63年1月～翌年4月まで高島成侑氏が連載された古民家紹介記事35編の再録と、対象民家の追跡調査に基づく新規原稿を合わせたもので、県下の民家保存の歴史を知る上で貴重な資料である。

Ⅳ章は、県下の代表的な歴史的都市である黒石・平川・青森・弘前・八戸について扱う。このうち青森・弘前・八戸に関しては多くの史資料を用いて具体的な都市の変遷を示しており興味深い。一方、記述は簡素であるが、平川市尾上地区に多数の土蔵建築が残存し、登録文化財件数が40棟に達していることは驚きであった。土蔵造立がリンゴ生産と関係していることと、戦後になっても土蔵が多数建築されている事実は大変興味深く、ぜひ現地を訪れてその実態を確認してみたい。

V章の近代建築は本書の顕著な特徴といえる。すなわち、Ⅳ章で扱つた黒石・平川・青森・弘前・八戸の4都市にくわえ、北津軽郡・中津軽郡・三戸郡・上北郡・十和田市・むつ市など広範囲にわたり近代建築文化の足跡が収集され、そのジャンルも洋館・教会堂・銀行・庁舎・学校・郵便局・図書館・博物館・店舗・軍事関係施設・ホテル・灯台・牧場・水道施設など多岐にわたる。また、戦後日本の建築界において重要な役

割を果たした建築家・前川國男に関して、最初期作品から昭和50年代まで網羅している点も重要である。この章は各項目の解説も詳しく、建築の特徴と価値づけを明記するものが多い。

付章は本書の最大の特徴といえる。付章設定の理由は「全国的にみて前近代遺構があまり残されていない」ためとし、発掘成果と文献史料によつてその欠を補い、「有力者層の建築」「寺社建築」「庶民層の建築」の実態把握を試みている。ただし、実際の記述は、全国的な傾向をふまえて青森県下の様相について総説的な見解も示しており、本書の欠点（総説部欠落）を補う役割も果たしている。また、文献史料から把握し得る県下の建築文化実態把握には限界があるとしながらも、棟札記事による大工・鍛冶名の整理も試みるなど、意欲的な執筆姿勢が注目される。

「絵葉書にみえる県内の建築・町並」は建築・町並に関する古写真集成といえる資料で、「空から見た建築」は町並や景観的観点から歴史的建築を考えるうえで示唆に富む。「県内のおもな棟札などの銘文」は、近世初期から明治中期までの25件の建築棟札を紹介する。「県内のおもな建築」は、①指定・登録等の文化財、②論文・調査報告書・修理報告書・自治体史・研究書などに取り上げられた物件、③景観等の観点から市町村において重要と認識されている物件、④高島成侑氏作成の建造物リスト、とともに一覧表化したもので、現時点においてもつとも整つた青森県歴史的建造物リスト（取り壊された遺構も含む）である。さらに物件抽出に参照した参考文献を、リスト化して添付している点も重要である。「用語解説」は、一般読者にとつて必須の項目で、図版を多数挿入した丁寧な編集がなされている。巻末の「掲載図版一覧」は、本書に

において写真や図版の出典とした参考文献を一覧表化したもので、編集における真摯な態度に好感が持てるとともに、既存資料に依拠しながらも必要図版は執筆者と事務局が懸命に整えている様子が窺える。

なお、巻頭の口絵は本文で解説する建築の代表事例を厳選し、魅力的な写真で紹介しており、読者の興味を高めるうえで効果を發揮している。

以上、本書の特徴として、現段階で収集しうる県下の建築史関係資料を基に、建築ジャンルや地域的な疎漏のないように配慮しながら、青森県全体の建築史について包括的に通覧できるように編集されている。特に文化財未指定物件についても積極的に取り上げる点、民家建築において新聞コラムを効果的に再録する点、近代建築を幅広く採集した点、発掘資料から見た建築文化に焦点をあてた点、などが特筆される。これによつて、一般読者にとって青森県下の建築文化を通覧することが容易になつたことは疑いない。また、青森県の建築文化を研究するうえで、基礎的文献と認めうるものである。

今後の課題

上記のように、本書が県史として「青森県建築史を包括する」啓蒙書

・学術書としての基本的役割を果たし得ることは明らかである。本書の成立事情を考えれば、関係者のご努力には敬意を表するのみである。とはいへ、いかなる事情があるにせよ、総説を欠いた建築史の概説書は異例であり、詳細に見ると内容に課題がないわけではない。以下に気が付いた点を記す。

まず、全体の総説が欠如しているのみならず、各章においても総説が欠如している。このことは本書における重要な問題である。幸いにも、付章において県下建築史の総説的な記述が試みられているが、やはり全体を総括した総説と各章における総説は必要である。

次に、I章における解説内容は、建造物の構造形式説明に終始するものが多く、その建築にどのような特色があるのかの説明がないものが目立つ。建築用語にルビを付して読解に配慮している点は好感が持てるが、やはり個々の建築の特徴がどこにあるのかを解説してほしかつた。

この他に、全体に関する内容として、建築年代の根拠に棟札を紹介するにもかかわらず、棟札の内容を本文において掲載するものがほとんどない点が気にかかる。建築史の基礎文献たる以上は、建築年代に関する史料は必ず紹介すべきである。個別解説で掲載しなくとも、「県内のおもな棟札などの銘文」において、関係する棟札等の造営史料は極力網羅して個別解説と関連付けてほしかつた。また、図面資料について、参考文献から転載する場合が多いため、図版体裁が不統一で、室名・寸法・スケール・描法など情報量の粗密も気になつた。さらに、挿入される写真の大きさも大小まちまちで、編集段階における十分な検討がほしかつた。

以上の問題点は、当初の責任編集者である高島氏が道半ばで逝去された後、建築史の専門家が後継編集責任者として存在せず編集作業が進行したことに起因すると思われる。そして、高島氏亡き後「刊行も危ぶまれた」本書の編集状況を顧みれば、こうした問題指摘は過大な要望かもしれない。

つまり、課題を有しつつも、本書は現時点における青森県建築史を包括する最新・唯一の基本文献であり、刊行に尽力されたすべての関係者にあらためて敬意を表したい。

そのうえで、今後本書の基礎文献としての特質を活かすための私見を述べたい。

まず、本書の体裁は、化粧箱入のA4サイズ布製ハードカバーの上製本で、用紙もすべてコート紙なので豪華・重厚であるが、携帯して建築見学に供するには不便である。そのため、本書を母体に製本を簡易・縮刷して、2分冊程度に再構成した携帯可能な「青森県建築史ガイドブック」を構想すべきである。そしてこの携帯版において、総説の追加や図版の净書など課題克服に対応していくのはどうであろうか。県史の場合、一度刊行されれば当面は改訂されることはないであろうが、内容的には常に最新の成果に留意して情報更新に配慮しておく姿勢が必要である。その意味においても、本書を母体とした携帯版を刊行して、逐次改訂版を送り出していくことは、県下の建築文化を後世に広く伝える重要な手段となる。

そのためには必須なことは、青森県の建築史を専門的に研究し総合的に把握できる人材確保である。本書でも示されているように、歴史的建造物は文化財指定の有無に限らず地域の固有文化を示す貴重な資産で、单体としての存在価値のほかに屋敷・境内・集落・都市など群としての景観的価値も高い。そしてこれらの地方創生は、こうした歴史的資産を見出し、地域に正しく伝え、保存活用を呼びかけることのできる人材を必要としている。すなわち、青森県や県下主要都市において、建築史に

精通した職員確保をはかることが必要である。本書の書評を通じて、こうした思いを強く抱いた。関係各位には、是非ご検討願いたい。

おわりに

本書の刊行により、青森県の建築史研究は初めて共通の基盤を獲得したといえる。今後は、この基盤を起点として、青森県の建築文化について県内外の関心が高まり、広く議論されることが期待できる。その関心・議論の深まりの中で、人材育成まで視野に入れた建築文化継承の機運が高まり、各地域の特性を生かした活性化に昇華していくことを願う。

(A4判、五七四頁、平成二七年九月、青森県史編さん文化財部会、五六一六円(税込))

(おおの・さとし 横浜国立大学理工学部教授)